

パリ通信 第165号

パリ・ケブランリー美術館で「岡本太郎展」

9月の新学期が始まり小学校には元気な児童の姿が戻ってきた。

8月のパリは猛暑日もあったが日本の比ではなく、8月末からは雨が降り秋の気温が続いた。9月第一日曜日の7日は久しぶりに30°C近い太陽が出て絶好の散歩日和となった。

フランスの多くの美術館では各月の第一日曜日が無料となる。美術館、博物館、歴史的建造物の入場料金は上がる一方でEU圏外の学生、観光客には割引料金はなく20€(3500円)を超える。第一日曜日無料は有難い。

「ケブランリー美術館」はジャック・シラク大統領下、建築家ジャン・ヌヴェル設計により2006年アジア、アフリカ、オセアニア・コレクションを収蔵する美術館として開館した。開館時に植えられた桜の木、ススキ、草花はいまでは大きく影を落とすまでに成長し緑の散歩道に成長している。



ここで「岡本太郎展」(2025/4/15~9/7)が開催された。1970年(昭和45年)

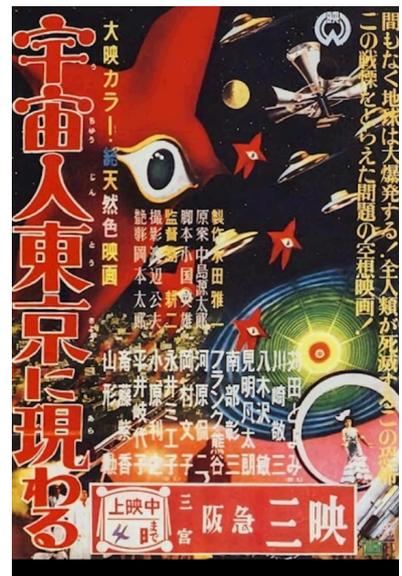
「EXPO'70 大阪万国博覧会～ 人類の進歩と調和」のテーマ館「太陽の塔」をデザイン・設計した岡本太郎回顧展である。

展覧会を企画したブノワ・ビュケ(Benoit Buquet)氏は1970年大阪万博について研

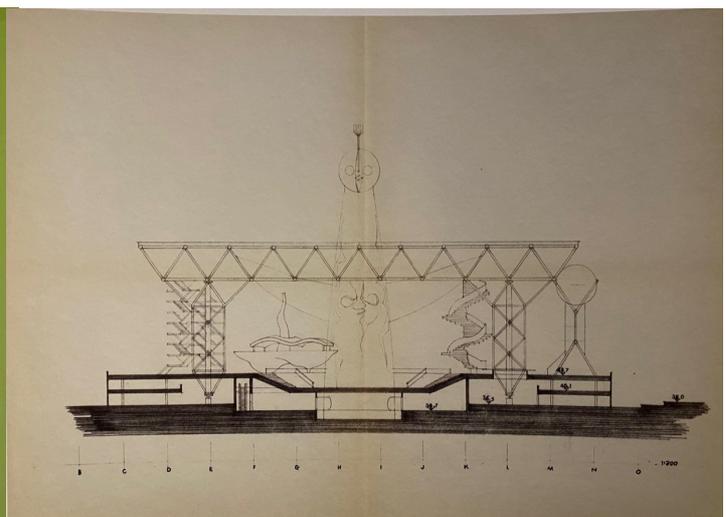
究し、フランスではほとんど知られていない岡本太郎の功績を讃えたいと会場に頻繁に通い自ら解説されていた。私たち日本人にとって、とりわけ1970年大阪万博を知る世代にとって、岡本太郎は身近な存在だった。

1911年漫画家岡本一平と歌人岡本かの子の間に生まれた太郎は、両親に連れられて1930年から1940年までの10年間パリに暮らす。シュールレアリスム、アヴァンギャルドの芸術家たちが活躍していた当時のパリは10代の岡本太郎の将来を育てた。1939年ヨーロッパで第二次世界対戦が始まり、1940年マルセイユから日本へ向けて出航する最終の船で帰国したのである。帰国後参戦し、満州で捕虜となるも生還するが、パリ時代の作品は戦火で焼失してしまった。

77ヶ国が参加し、来場者6000万人を超えた「EXPO'70」で圧倒的なインパクトを与えた「太陽の塔」、ブノワ・ビュケ氏は現在のフランスにおける絶大なる日本ブーム、つまり漫画、アニメ、特撮映画、キャラクター人気に貢献したのが前衛芸術家岡本太郎だと言う。1956年公開の映画「宇宙人東京に現わる」(配給:大映)(監督:島耕二)(特撮:的場徹)は日本初のカラーSF特撮で、登場する「パイラ人」(一つ目の赤い星形の宇宙人)のキャラクターデザインを担当したのが岡本太郎である。的場徹はその後「ウルトラシリーズ」を手掛け、円谷プロダクションの創始者で特撮監督として怪獣映画(東宝から「ゴジラ」)を撮った円谷英二と共に日本の特撮を牽引する存在となる。



高さ70mの「太陽の塔」は足場のような金属の構造体の中央に置かれ、塔の内部には「生命の樹」があった。常に新しい芸術を目指し、破天荒とも言える岡本太郎のインパクトが傑出した「太陽の塔」は今も力強さを失っていない。あまりにも有名になった「芸術は爆発だ」の宣伝のように内から湧き上がるエネルギーを



有していた。ピアノに向かい激しい色が炸裂するマクセル(Maxell) ビデオカセットのCM(1981年放映)は岡本太郎がパリで培った姿勢をよく表している。NHKは「TAROMAN 岡本太郎式特撮活劇」(全10話)を2022年7月教育

テレビで放映し、「TAROMAN」グッズはマニアの大人気で人々魅了する力がある。当時の斬新さは今なお古びていない。

55年経った「EXPO 2025」(4/13から10/13までの184日間開催)。「いのち輝く未来社会のデザイン」がテーマ。8/30時点で1900万人の来場者数との発表だが、70年大阪万博時の熱狂、未来への期待は感じられないように思う。見ていないので批評はできないがパリにいて聞こえてくるのは「フランスパビリオンは人気だ」「イタリアパビリオンにはカラ



ヴァッジョが来ている」「海外から入場券購入サイトにはアクセスできない」「マレーシアパビリオンは隈研吾の設計だ」など、断片的な話題性のみで2025年にあえて万国博覧会を開催することの意味、意義は見えてこない。万博会場に足を運んでみれば印象も変わるのかも知れない。（古賀順子記）